

特集号「体系的言語教育における広領域型研究と実践」 刊行にあたって

平成24年度から26年度までの3年間の研究プロジェクトの成果の一環、「体系的言語教育における広領域型研究と実践」特集号を、『島根大学教育学部紀要』第48巻別冊として刊行する。このプロジェクトは、言語教育に関する多元的探究を目的とする共同研究として平成17年度に学部長裁量経費配分を申請したことに端を発して、10年間継続している研究連携の最新の3年間に相当する。平成18年度以降は9年連続で、学部長裁量経費配分の対象となっている。

この研究連携・共同研究を構成するのは、教育学部と附属学校の国語と英語を専門とする教員の全員である。学校教育の中の言語教育活動を形成する2大分野と言える母国語教育と外国語教育（英語）の係、小学校から大学までの教育者・研究者の係は、先鋭的な試みであったと認められる。言語に関する教科として共通するとはいえ、主要2教科の有効な協同は簡単ではない。踏襲すべき先行例があったわけではない。その中で、いわゆる「教科専門」と「教科教育」の共存・並立ではなく、連帯・統合を目指した。言語教育の体系化を志向したとも言える。そのための試行と見直しの10年間であったと言っても過言ではない。

その試行の過程で、平成22年度、本特集号と同様の編成で、学部紀要の第44巻別冊として「言語コミュニケーション教育の研究と開発」特集号を刊行することができた。5年間の成果結集を企図したものである。それを踏まえた反照を経て、次の段階として本プロジェクトが成り立ち、本特集号が生まれた。最近4年間の進展とその過程が僅かでも投影できていれば幸いである。

本特集号には、11編の研究論文・報告が収載されている。著者の専門領域は、日本語学・日本文学・中国学・言語学・英語学などの教科専門と国語教育学・英語教育学などの教科教育に大別できる。11編の題名を見て、それぞれの著者が教科専門か教科教育のいずれに属するか、判別できるであろうか。両者は係・融合したと言える。教科専門は教科内容学となって、教育実践を内包するようになった。また、国語と英語で二分されるように配列されていない。両者は混在し、連関し、一つの体系を創りつつある。本特集号全体が教科内容の研究とそれに基づく授業デザインを目指す点で一致しているとも言える。

ささやかかもしれないが、本プロジェクトは前進しているのではないか。目的地までの道は遠いが、日暮れにも遠い。この道程が言語教育の未来へ繋がることを願う。

島根大学言語教育研究会 代表

体系的言語教育における広領域型研究と実践プロジェクト代表

福田 景道